

ひとつの生命

万緑

六月のすがすがしい陽の光が、新緑の木の間に透明に流れます。花から若葉へと変った天地は滴るような緑に、若人の肌のような艶を見せて、明るい午前の陽光に輝いています。

万象はただ一つの力に生ききっています。はちきれんような生命のたぎりが若芽の上に躍動しています。

野も緑です。山も緑、街も緑、同一の色彩が大地を包んでいます。谷間の白百合がその色をひきたてる。

一切大聖

「我聞く是の如し

一時仏 王舎城耆闍崛山の中に住し

大比丘衆 万二千人と俱なりき

一切の大聖 神通己に達せり。」

これは親鸞聖人が唯一の眞実教として見出されたる大無量寿経の巻頭の大文字であります。

耆闍崛山における大無量寿経の会座は将に開かれようとしています。そしてそこには万二千の大衆が列座します。しかもそれが皆「大聖」ばかりであります。智慧と慈悲の眼の開かれたる「神通己達」の大聖ばかりであります。初夏の天地の若葉のように……………。

同一の生命

私たちが講演しましても、現世祈祷の迷信ばかりに囚われた村で、十八願の世界どころか、眞実生活などと申しても、てんでわかつてくれません。全くの無教地で、人生などについて考えたこともない。我利々々根性に全く捕えられて、金か、でなければ名誉か、でなければ色か、それしか考えていない人たちに、深い宗教的な世界を語ろうとしたって、それは全く徒勞であります。深い世界を聞くのには、それ相当の準備を要します。

何を聞いて感心しているかを見たら、その人の世界の深さがわかります。

長い間釈尊のお側に常随していた阿難尊者すらが、驚きの眼を見はらなくてはいられたかった釈尊の聖容、それは実に万二千の大聖たちの前においての光景でありました。

今日は釈尊は何をお説きになってもわかるのです。それぞれの人に差別はありながら、差別を超えて大衆の中には、同一の生命が躍っていたのです。

その万人の上に躍動せる生命は何であったのでしょうか。

それこそ、即ち法蔵菩薩の本願そのものであったのではありますまいか。

ああ、同一の聖きいのちのたぎり、同一念仏の同胞の大会衆、釈尊が輝かれたのも無理はありません。

この信境

私どもは今、二千五百年の時の隔りを超えて、万二千の「神通已達」の大聖の前に宣説せられたる大経の会座に列して、この大乘無上の法を聴き得ることを喜ばないではいられません。

二千五百年の古には、この力が釈尊の衷心に躍動して、

「天上天下唯我独尊」

と叫ばしめ、この生命の光が七百年の昔には、親鸞聖人をして、

「愚禿親鸞！」

と大地に一切衆生の罪悪苦悩を荷負して合掌せしめました。

昭和の今日、同一なるこの大信が、念仏が、ささやかなる我等の上によびかけて、信一念として我等の上に火蓋をきりました。

「ああ、弘誓の強縁は多生にも値ひがたく、真実の浄信は億劫にも獲がたし、たまたま行信を獲ば遠く宿縁をよろこべ。」

それは聖人の歓喜にみちた信境でありました。

これなくしては生きること死ぬことも出来ないという、人間最後のたった一つのもの、これを獲なければ、人生は結局醉生夢死、唯ナンセンスな悪夢にすぎない。聖人にとっては大経によって獲られたる法蔵の願心、仏の名号、これがなかったならば、遂に人生は呪われたる生死界でしかなかったのです。釈尊の八万の法蔵すが用のない煩雑な哲学である。ただこれあるが故に、人生の全ての矛盾も呪いも解けて、真に笑い得る、尊き道の生きる園林遊戯地。

眼をつぶる。親しい念仏の同胞が見える。

同一の念仏の呼吸をつづけ、同一の信の血に結ばれた同胞たちが。最後まで愛し合い、結ばれあい、育てあうべき、最上の宿善の力によって会うことの出来た同胞たちが。おゝ、諸上善人俱会一処。

形骸をこえて

大無量寿経の会座を憶う。

集った人たちの中にはたった一つのものが流れていた。釈尊の中に流れたいのちは万二千の聖者たちの中を流れるいのちであった。

そこには教える先生と、教えられる弟子との差別はなかった。

世間では学歴がものを言います。権力がものを言います。地位がものを言います。金力がものを言います。門閥がものを言います。

しかし釈尊の世界ではそんなものを持ち込むことを許されませんでした。王族の出である阿難も、首陀羅種の出である身分の卑しかった尼提にだいも、平等に仏の可愛い尊者でありました。

諸行無常の前には門閥や学歴によつて差別はありません。人間の本質的価値、存在の尊厳さ、生きねばならぬ権利に差別のあろうはずがありません。

更に目覚めたる人の心に恵まれる「信」の生命のたぎりに、変わりのあろうはずがありません。

私たちの世界でも

学歴がものを言いません。

権力もものを言わない。

金力も家柄もその他全てがものを言わない。

ただ私のうちに燃えているこの念願が、願心のみが、ものをいうだけです。

私たちの陣営では殊更にこの同胞意識がはつきりしています。たとえ私たちは今浅ましい憎悪によつて隔てられているにしても、一度同一の念願にむかつて歩みはじめた時、たった一つの久遠の真実に目覚めた時、同じ「信」が誕生します。同一の地下水が自然法爾にお念仏となります。

私たちの魂は、たとえ肉親の親族であろうとも、この同一の如来の血潮に目覚めてつながれない以上、他人も同様であることを知りすぎています。私どもが時に淋しさを感ずるのも、時に涙するのも、義憤や公憤を感ずるのもそれがためです。

私たちは形式や殻や、殿堂や、教権や煩雑な教理や規則だけが残り、何でもないお金で買った肩書や、衣の色や、学階だけがものを言つて、すでに生命の脈のあがつてしまった世界を嫌います。今の初夏のように魂の躍動した世界を慕います。ですからブル的な形骸だけが残つた無生命な世界を超えて、この血の流れた、輝しい世界を造つて歩みます。

この喜悅

私たちは誰とでもすぐ同胞になります。

涙辺におりたつて網を引く人とでも、中学校の教室で教鞭とつている文学士とでも。患者の脈をとつていなさるお医者様も、工場で糸をくつている乙女子も、田園に土を耕す若人も、それが一切を棄て、人間線上に下り立つて、この清浄なる如来の信の血に一味となる以上、私たちは、唯お互の尊敬と、礼儀と、よろこびによつて結ばれている同胞であります。

来る手紙もくこの強い同胞意識の盛られていないのがあるうか。

「一切衆生をながめては

生々世々の親よ子よ

南無阿弥陀仏に目覚めなば

はてしも知らぬ群生に

無限の愛の涙わく

聖親鸞の偉大なる。」

怨親平等に唯同胞である。

否その単なる怨親平等の思想すら外道である。

法蔵菩薩は一切群生の下座に合掌したもう。

その世界に下りて合掌する時、大信海に於いて一切衆生は同胞である。

過去の聖者は怨親平等を生活の上に実践した。一切衆生悉皆同胞の信こそ、親鸞聖人の道義の根底であつた。

私たちは今、この信の世界において、あなたと会つた。

涙ぐましいほどの生の喜悦と、躍動するいのちを感じる。

一切を超えて

大無量寿経の会座において、釈尊は

「爾時 世尊 諸根悦渡し、姿色清浄にして光顔巍巍たり……………」 今日、世尊

諸根悦豫し、姿色清浄にして光顔巍巍たること明浄なる鏡の影表裏にとおるが如し。威容顕曜にして超絶無量なり。未だかつて殊妙なること今の如くなるを瞻覩せず……………」

諸根即ち、目と耳と鼻と口と体と意、この六根ことごとく、よろこびに輝いていらせられた相の表白です。

内に尊いものが輝く時、外にも現われて来ます。釈尊のみ相の輝しく、光顔魂々としました世界を阿難は五徳をあげて讚嘆した末に「去、来、現の仏、仏と仏と相念じたまえり。今の仏も諸仏を念じ給うことなきことを得んや。」と申しました。大無量寿経は実にこの「仏仏相念」即ち念仏の世界から生れたものであります。大経の会座における釈尊は法を念ずる仏でなくして、仏を念ずる仏であつたのであります。その念じられた仏こそ、南無阿弥陀仏でありました。

私たち同胞が集りました時、他のいづれの会合よりも、親しさと喜びを感じます。「同一に念仏して別の道なきが故に、遠く通ずるに四海のうち皆兄弟」だからであります。

釈尊の上に躍動した法蔵魂が万二千の人の上に、そして今日の我等の上に躍ります。

青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光と咲く華に差別はあつても、その根底に動く力に二つはありません。皆如来の正覚より生れた春の華にすぎません。

如来浄華衆 正覚華化生

如来浄華の衆とは「他力の信心を得たる人を浄華の衆とはいうなり。これはおなじく正覚の華より生ずるなり。」（安心決定抄）

大経の尊き会座はそのまま十方無量の諸仏まします真如界に通じます。そしてその尊き会座はそのまま我等の念仏の生活に通じます。

我等の喜びは我等の骨髓に徹したもう法蔵の本願に結ばれて一つであります。

私たちは何時も一切のはからいを棄てて如来の大信海にかえります。

善悪一切を超えて、淨穢全てを超えて、裁きの役だたない世界に飛躍します時、私たちは、そこに多くの同胞を発見します。

天親菩薩は、念仏の讚嘆文によつて、そこに大会衆門が開かれると申されました。大会衆門とは如来による聖者の集会であります。

聖人は十七願の十方世界無量の諸仏の上に咨嗟讚嘆せられる名号が、そのまま我等の上に成就せられる大行念仏であると説破せられました。

我等の上に名告られてある念仏は、そのまま十方無量の諸仏の上に名告られる念仏であります。

我等は今、この全一なる光の世界に生れ出でました。

同一の念願

我等は同一の願いに生きています。

我等は同一の希望に輝いています。

我等は同一の如来の生命に燃えています。

我等は同一の喜悦に結ばれています。

我等は同一の白道を歩ませて頂いています。

我等は同一の生命に躍っています。

我等のこの同一の火の力はぐんぐんと野火のように拡大されてゆきます。

我等の魂の根本の願いは、万人が一つにつながつて互に笑むことの出来る世界を成就しようということです。ことさら好きこのんで戦いをする者が何処にありましよう。鬭争するどころか、皆が一つのよろこびに浸りたいのです。人類はこの念願成就のために努力して来ました。我等はこの衷心の願いを妨げる一切のものを排除するために戦わねばなりません。人間に鬭争がおこるのは、真の平和を成就するためだつたと言つてもいいのです。

太陽を見よ

「先生私は淋しいのです。私の二十五年の生涯は無意味のものだったので。私は人生について考えはじめました。そうして懸命な求道が始まりました。私は飽くことなき心のままに聞きはじめました。私の前には全く違った世界が拡げられて来ました。私はこれまで小さい私の殻に立てこもり、人生を愚痴な心でひがんでながめ、人を裁き呪つて、我と自ら滅亡の墓穴を掘つていたのです。私はやつとそれから浮び上つて、天日を拝まして貰つたような気がします。暗かつた私の心は喜びに輝き、重々しかつた私の心は明るくなり、狭かつた私の心は広くなりました。

しかし私はその眼を持つて私の周囲を見ました。見ねばならぬ日が来ました。私の心には一時に淋しさがおそつて来ました。父は母は、兄弟は、友人は、そして隣人たちは、生活中心の本尊をも持たないで、唯ジャズ的な空気の中で、今日一日を無意味に遊んでいる人、物質の奴隷になつている者、迷信祈祷を有難がつている者、人間

苦に虐げられて泣いている者、狂暴な悪魔性を發揮して恥じない者、安価なエロ、グロの世界に墮落した者。私は眼もあてられない様子を見出さねばなりません。そればかりか、かえって私は、父からさえ侮辱の眼を持つてながめられていました。「道の、信念の、と言っておられるか、要するに人間はずるい奴の、世間をいい加減にゴマ化す奴が勝つのだ。金だよ。」親からさえこんな言葉を聞かねばなりません。「生だの、死だの、と言った所で何になるのだ、お前も勉強して、出世でもするのだなあ」とは、伯父の言葉でありました。友人の読物は安価なナンセンスなエログロです。私たちの言うことを聞きそうにさえありません。私はそこに淋しい世界を発見しなくてはなりませんでした。」

明月や座頭の妻の泣く夜哉。

あなたの涙は苦を逃避しようとする者のそれでもなく、楽が得られないという愚痴でもなく、一切を受けまいとする傲慢でもない。

私はその涙を知りすぎる！

しかしその涙はやがて何を生むのか。

もう一度活眼を開け、それだけでは、あなたは再び大きな愚痴に陥る。

あなたの周囲は、はたしてあなたを殺すか、それとも生かすのか。

太陽を見よ！

重ねていう太陽を見よ！

奇蹟

奇蹟！ 不思議！

過去の偉大なる聖者たちの徳を表わすために、普通の形をしていない植物などを結びつけて、やれ逆竹の不思議、やれ焼栗の芽、そんな不思議と聖者の徳とを一つにして、無智なる民衆を拝ませたり、喜ばせたりしました。しかしそれがはたして聖者の徳でしたでしょうか。五本指のあるはずの手に指が六本あったり、一つであるべき鼻が二つあったりした場合、それは不具者です。その不具者を聖者の奇蹟の如く考えたのは、その裏に民衆から金を搾取しようとした悪魔がいて、その仕業でしかないのです。私たちはかかる無智を恥じなければなりません。

しかし私どもは奇蹟を信じます。

学識も富も年齢も何不足のない人が何故に平凡なのでしょう。

然るに二十二歳の彼女は一市を動かしました。又一村を動かしました。人が褒めようと、貶そうと、さながら聞えないものの如く、黙々として活動しつづける彼女は、あれだけの仕事しました。それを見た時、奇蹟だと思いません。

平凡人には出来そうもない仕事をやってのけた時、

何か普通人では持てない苦悩を勝ちつづけて生ききった人を見る時、

普通の人には出来そうもない生活を何か持つが故に成就されたのだと思う時、

私たちは奇蹟をその上に見ます。

奇蹟のないような一生はぐうだらな一生です。

衣服の色柄を言われる位で二日も三日も苦しまねばならぬ老婆が、親鸞聖人の稲田の草庵における弁円との事実を唯有難いことと涙を流しています。

生活は出来ていなくても涙は流れる。

彼等は唯、親鸞見物人にすぎない。

我等は唯、聖者の見物人であつていいのか。

あなたの中には、どれだけの力がある！

つまらぬ善悪観念や、世間態に心をひかれる弱虫に何が出来よう。

如来があるのかないのか、そんなぐうだらな質問にお答する時間を持たない。

全我をなげ出せ、奇蹟が生れる。

ただそれだけだ。

南無阿弥陀仏は如来の生命であると共に、煩惱に燃えあがる人間のいのちである。